

機関番号：31303
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2008 年度～2010 年度
 課題番号：20530175
 研究課題名（和文）ヒックス厚生経済学の形成史的研究——兵庫県立大学所蔵「ヒックス文庫」を手がかりに
 研究課題名（英文）Historical Studies on the Formation of Hicks' Welfare Economics, Regarding the "Hicks Papers" Owned by the University of Hyogo
 研究代表者：
 金井 辰郎 (KANAI TATSURO)
 東北工業大学・ライフデザイン学部・教授
 研究者番号：90332022

研究成果の概要（和文）：

本研究は研究代表者の前研究「ヒックス厚生経済学の形成と展開——神戸商科大学所蔵「ヒックス文庫」を手がかりに」（平成 16 年度～18 年度科学研究費補助金若手研究(B)）の続編であり、兵庫県立大学（旧神戸商科大学）所蔵「ヒックス文庫」に含まれる、厚生経済学関係の草稿を引き続き検討したものである。1950 年代初頭のヒックスに課された（新旧）厚生経済学の改訂という課題を、ヒックスがいかに捉え、いかに乗り越えようとし、また乗り越えられなかったかを、未公開の草稿から跡付けた。

研究成果の概要（英文）：

This research was a sequel of the previous research by the same author, "The Formation and Development of Hicks' Welfare Economics – Regarding the "Hicks Papers" Owned by Kobe University of Commerce" (Grant-in-Aid for Young Scientists (B), 2004-2006). This sequel as well focused Hicks' conversions on welfare economics in the early years of 1950s, when welfare economics – what is called, new and old – was about to collapse, in light of his unpublished manuscripts in the "Hicks Papers."

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済学説・思想

キーワード：経済理論、思想史、厚生経済学、J.R.Hicks、ヒックス文庫

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、平成 16 年度から平成 18 年度にかけて、科学研究費補助金（若手研究 B）の援助を受け、「ヒックス厚生経済学の形成と展開——神戸商科大学所蔵「ヒックス文庫」を手がかりに」（神戸商科大学はその後、

兵庫県立大学に改組・改名された）というテーマで研究を行ったが、その過程で同文庫がヒックスの厚生経済学の形成過程を解明するための貴重な未公開資料を多く含むものでありながら、現状で専門的な研究者による検討をほとんど加えられないまま放置され

ていることを再認識した。研究代表者は上記研究（資金）により、同文庫に含まれる未公開資料をマイクロフィルム化し利用可能な状態にするとともに、ヒックスの厚生経済学の変質・転向の過程を窺わせる資料を発掘、検討するなどの成果を得たが、含まれる資料が膨大であることから、その前研究の段階では「ヒックス文庫」の全体像に辿り着くことができなかつた。そこで本研究では、その前研究の延長線上に、「ヒックス文庫」の全貌を解明すべく、より広範な資料に関して継続的な研究を行いたいと考えた。

2. 研究の目的

ヒックス厚生経済学の形成・変質過程をめぐっては（Chiodi and Ditta (1999)などに若干の記述はあるものの）現在まで経済学史プロパーのまとまった研究はほとんど存在しなかつた。また、このたび手がかりにしようとしている「ヒックス文庫」をめぐっても、そもそもそれを扱った研究自体が篠崎(1998)、篠崎(2002)、Marcuzzo ed. (2006)くらいしか見当たらないのが現状である。

1972年、ヒックスは『価値と資本』（1939）をはじめとする、ヒックスとしては初期の一般均衡理論と厚生経済学に関する功績からノーベル経済学賞を与えられたが、かれ自身「すでに抜け出してきた仕事に対して榮譽を与えられたことについて複雑な心境にある」（Hicks, 1977, p.v）とさえ述べているとおり、かれの経済学者としての人生の中期以降、ヒックスは次第にそれら初期研究から離反し、変質していった。ヒックスは1950年代初頭より、自らが苦心して構築したはずの一般均衡論、消費者余剰論を基礎とする（新旧）厚生経済学を破壊し、その再構築を目論む。その変質・転向の過程は、ヒックスという人物を描き出すために不可欠で興味深いドラマを含むと考えられる。

研究代表者はすでに前研究により、「ヒックス文庫」中の未公開草稿「厚生経済学に関するもう一つの試み（Another Shot at Welfare Economics, ASWE）」が効用の集計に拠らない物価指数論に基づく厚生経済学を提唱しており、Hicks(1958)、Hicks(1975)などに類似するが先行する内容を持つものであることを明らかにしたが（Hicks no date (Kanai 2006, 2007)）、「ヒックス文庫」中には同草稿以外にも厚生経済学に関係する多くの貴重な未公開資料が含まれている。研究代表者は前研究の過程で、それら対象となるすべての資料の（特に自筆草稿の）解読・検証を開始していたが、時間および予算の制約から、その完全なる解明には到達できていなかった。本研究では、それらの分析を一刻も早く終え、厚生経済学に関するヒックスの変質あるいは転向を、利用できる未公開の新資

料すべてから跡付けるべきであると考えた。

3. 研究の方法

Eleonora Sanfilippo 氏の助けを借り、膨大な自筆草稿のうち、前研究で解読を完了していなかった部分の transcription を行った。その上で、解読済み原稿およびタイプ打ち原稿の考察を行った。

4. 研究成果

現時点で参照することのできた資料の範囲での暫定的結論は以下のとおりである。

ヒックスが経済学をめぐって、何回か、そしていくつかの点で立場を変更したことは——その細部についてはともかく——一応知られていると見てよい。ヒックスが自伝的に述べた記述によれば、それは次の3つの段階に分類された（Hicks 1974, 3-4）。

- I. Hicks(1934)、Hicks(1939a)
- II. Hicks(1939b)、Hicks(1940)、Hicks(1941)
- III. Hicks(1956)、Hicks(1958)、Hicks(1959)、Hicks(1965)

第I段階は、ヒックス自ら「厚生経済学の非信奉者」であったと評価する時期で、もっぱら実証的経済学に関わっていた時期である。第II段階では、カルドアとともにいわゆる新厚生経済学を構築したが、彼らが提唱した新厚生経済学はシトフスキー、サミュエルソン、リトルらによって「吹き飛ばされた」。第III段階では、第I段階に属する実証的経済学としての「需要理論」が、サミュエルソンらの顕示選好理論に照らして改訂された。また実質所得（Real Income）に関する著作を書き、厚生経済学の改訂を始めたが「厚生経済学の完全な改訂は成し遂げられず、改訂を始めたということ以上のもではなかつた」。本研究が扱ったのは、このうち第II段階から第III段階への過渡期である。

ヒックスは Hicks (1939a)、Hicks (1939b)、Hicks (1940)などにより、Kaldor(1939)とともに、補償原理に基礎をおく、いわゆる新厚生経済学（の理論）を考案した。それは効用の個人間比較を前提にしない序数的な厚生分析であり、Robbins(1932)により反駁されたピグー型の厚生経済学を乗り越えたものであった。ところがほどなくして、この発明物は多くの論者によって批判され放逐された。Scitovsky(1941)は、ヒックス的な補償原理も、カルドア型の補償原理も、順位の循環を生じさせてしまい結論に到達できないケース（シトフスキー・パラドックス）があることを示した（周知の通り、さらにヒックス基準とカルドア基準の双方を満たす場合のみ厚生改善が行われたか否かを判断すべき

であるとする、いわゆるシトフスキー基準も、ゴーマン、サミュエルソンらにより否定されることになる)。結局のところ、ヒックス＝カルドア型の新厚生経済学は発表からわずか2年で否定されることになってしまったのである。

このような新厚生経済学の閉塞状況を打開することこそ、1950年代におけるヒックスに課された課題であった。本研究で扱った未公開草稿「厚生経済学：講義 I-IV」(WEL)によれば、まさにそのような閉塞感こそが、ヒックスをして、厚生経済学の改訂という仕事に向かわせる原因であったことが窺える。確かにヒックスは、ヒックス＝カルドア型の新厚生経済学を完全に否定しているわけではなく、のちの論者による、まるで重箱の隅をつつくような批判に対しては、普通の社会ではほとんど生じないようなケースに関するものであるとして、その批判の妥当性に疑問を呈していた(WEL)。しかし、そうはいつでも、ヒックス自身が作り上げた「カタラクティクス」(＝一般均衡論あるいはマイクロ経済学)あるいはそれに基づく新厚生経済学を、かつてかれが辿ったのと同じ方向で書き直す可能性もほとんどないと考えていた。したがってそれに続くヒックスの厚生経済学は、新厚生経済学ではない、あるいは同じ意味で「カタラクティクス」ではない、代替理論である必要があった。そしてその代替理論こそ、かれが「厚生経済学に関するもう一つの試み」(ASWE)において初めて示した(1954年ころ)ところの「富の理論」だったのである。「富の理論」とは、彼自身がかつて Hicks(1940)において展開したところの物価指数理論に方法的には依拠しながらも、カタラクティクスで行われたような、効用と厚生の大さを問題にする手法を改め、社会的生産物の測定を指向するものであった。ヒックスは明示的に述べなかったが、それはおそらく国民総生産を経済的厚生を表示物としてとらえる学説(プルトロロジーあるいは厚生経済学の富裕アプローチと呼ばれるもの)に近いものとして構想されていた感がある。「富の理論」とほぼ同じ主題を扱ったもので、刊行された論文としてもっとも早いものは Hicks(1958)であると思われるが、ASWEはそれを4年ほどさかのぼる。また旧来のカタラクティクスあるいは「経済厚生主義 economic welfarism」からの離反を明示的に宣言したのが Hicks(1959)であるとすれば、同じく ASWE はそれを5年さかのぼる。ASWE は、部分的に Hicks(1940)、Hicks(1958)、Hicks(1974)、Hicks(1975)、Hicks(1976)、Hicks(1981b)に類似しているが、他の既刊論文と比較し、より強く、旧来の厚生経済学(これはいわゆる新厚生経済学をも含む)の破壊と新体系の創造を志向して

いる。ASWEに示された「富の理論」は大別して、費用アプローチに基づく議論と効用アプローチに基づく議論に分けられるが、いずれも物価指数理論に近い方法で、社会的生産物の増減が論じられている。それらの議論はのちに上述の複数の既刊論文に、小出しにまた大小の変更を加えながら盛り込まれたのである。

上述のとおり、ヒックスは自身による回顧(Hicks 1974,3-4)において、厚生経済学の改訂という仕事がうまくいかなかったことを告白したが、そのことはまさにこの ASWE に加え、「実質生産物：厚生経済学の改訂」(RP)、「社会的生産物の費用による測定」(CMSP)といった大部の未公開草稿が、完全な形で出版されず、草稿のまま残ってしまった事実と符合していると思われる。ヒックスは、多くの批判により自らの新厚生経済学がほぼ瓦解してしまったことを認識したあと、それに代わる厚生経済学として「富の理論」に基づく厚生経済学を企図した。しかし、そのようにして構築された新しい厚生経済学も、やはりヒックスにとっては満足のいくものでなかった。ヒックスが随所で言及しているとおり、指数理論は厚生経済学の課題である社会状況の比較という作業に際し、何を基準物にするかによって結論が変化してしまうという「相対性に毒されて」おり(ASWEなど)、原理論まで高めることが難しかった。そのため、これら「富の理論」に基礎をおく新しい厚生経済学は、完全な形では出版されず、草稿のまま残ったのである。

本研究では、Eleonora Sanfilippo 氏の助けを借り、膨大な自筆草稿を transcribe した。それらのすべてを検討することが、研究代表者にとって不可欠なことではあったはずだが、残念ながらそれを時間内に成し遂げることではできなかった。上述の RP や CMSP のように、まだ分析が終わっていないが、非常に重要な草稿が多く存在する。本研究がそのような意味で不完全なものに終わってしまったことについては、率直に自身の非力を詫びるとともに、近い将来、それらすべてを考慮したヒックス厚生経済学の形成史的研究をまとめ上げることを誓い、許しを請いたい。

前研究から引き続き、通算で6年間にわたり資金を援助してくださった日本学術振興会に感謝申し上げます。また、研究の基礎と成る「ヒックス文庫」の資料を利用させていただいた兵庫県立大学にもお礼申し上げます。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計1件)

金井辰郎, J. R. ヒックスの未公開講義ノー

ト「厚生経済学：講義I-IV」について，経済思想研究会（於東北大学），2010年12月5日．

〔その他〕

ホームページ等

金井辰郎，『ヒックス厚生経済学の形成史的研究——兵庫県立大学所蔵「ヒックス文庫」を手がかりに』，平成20～22年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書，平成23年3月．

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金井 辰郎 (KANAI TATSURO)

東北工業大学・ライフデザイン学部経営コミュニケーション学科・教授

研究者番号：90332022